Part 3 文化人類学と教育

大学院生のフィールドワーク

[本文] 朝倉敏夫
総合研究大学院大学教授地域文化学専攻

[出席者] 高 正子
総合研究大学院大学比較文化学専攻
南出和余
山本 陸
総合研究大学院大学比較文化学専攻

朝倉 今日は、文化科学研究科の地域学、比較文化学専攻の院生として、何を、どのように研究しているかを語り合おうと思います。まずは、自己紹介をしておきたいと思います。まず、小野寺秀夫先生を紹介させていただき、皆さんのお蔭で、この研究の内容をより深く理解したいと思います。

高 私は、総合研究大学院大学の地域文化学専攻の院生です。研究テーマは、アジア地域の伝統文化と現代社会の関係を研究しています。特に、韓国における伝統文化の変化を、地域社会の変化と関連させて考察しています。

南出 私は、修士課程では、バンクーバーの農村部を研究対象にしており、地域の伝統文化と現代社会の関係を考察しています。特に、地域の伝統文化を活かした地域開発のあり方を検討しています。

山本 私は、西部地方の地域文化を研究しており、特に、地域の伝統文化が地域社会の変化にどのように影響を与えているかを考察しています。特に、地域の伝統文化が地域社会の変化にどのように影響を与えているかを考察しています。

なぜ、研究の道を志したのか

朝倉 それぞれ皆さん、地域文化を研究しておられるのかもしれませんが、私自身の場合、地域社会の変化と伝統文化の関係を考察することを志しました。特に、地域社会の変化に伝統文化がどのように影響を与えているかを考察することを志しました。

高 私は、地域社会の変化と伝統文化の関係を考察することを志しました。特に、地域社会の変化に伝統文化がどのように影響を与えているかを考察することを志しました。

南出 私は、地域社会の変化と伝統文化の関係を考察することを志しました。特に、地域社会の変化に伝統文化がどのように影響を与えているかを考察することを志しました。

山本 私は、地域社会の変化と伝統文化の関係を考察することを志しました。特に、地域社会の変化に伝統文化がどのように影響を与えているかを考察することを志しました。

朝倉 南出さんの話で、地域社会の変化と伝統文化の関係を考察することは重要です。特に、地域社会の変化に伝統文化がどのように影響を与えているかを考察することは重要です。
思うのです。何が好きかと聞かれて学校を答えな子どもたちにとっての「学校」とは何か、「行かななければならない」、「行くのが自然」の日本の学校とは違え、そこには学校に行くことによって得られる、何らかの希望や利益という動機があるはずです。それは、子どもの生活の世界から見ていかなければ理解できないのです。

そこで生まれたのが Pancake デペンの教育、子どもに注目するようになったきっかけです。

朝倉　日本でのアデンス研究は、とくに考古学の分野でしているのが、山本さんのこと、なぜアデンスの古い研究にいったのですか。

山本　日本でのアデンス研究は、京都大学の古河文化を研究しているのですが、山本さん自身は、なぜアデンスの古い研究にいったのですか。

朝倉　日本のアデンス研究は、とくに考古学の分野でっているのが、山本さん自身は、なぜアデンスの古い研究にいったのですか。

山本　日本のアデンス研究は、とくに考古学の分野でっているのが、山本さん自身は、なぜアデンスの古い研究にいったのですか。
たのですね。南出さんは、子どもという異なる世代の中に入っているわけですね。そういう出会い、つながりというのは、どういうふうにもたれているのでしょうか。

南出 先ほど、高さんが「演劇者の側から見る」とおっしゃいましたが、フィールドワークでは、対象をどこから見か、つまり、どういう立場に自己の身を置くかが非常に重要で、また、それが文化人類学にしかできないことだと最近、強く感じています。私は、子どもの側から社会を見るかと思っています。たとえば、教室の中で、子どもと席を並べて見るのは、先生の立場から見ること、あるいは観察者のように後から見るのではなく、見つけてまっとうに違うはずです。

私はいま、バンガラデシュ北部、ジャンマール県のある農村でフィールドワークを継続中で、村の農家に居候させてもらって、NGOが運営する学校を中心に調査活動を行っています。身体的には大人であり、無視はあるでしょうし、毎日、子どももいっしょに学校に行って、席を並べて勉強しています。学校の先生も、私に宿題を出し、宿題をこければ怒るというような、あえてそういう立場をとてくれています。

もちろん、子どもと一緒にいろんな時間過ごしても、私には見えない部分がないわけではありません。人類学で子ども研究が少ないのは、やはり大人は子どもの立場になりきれない、という理由もあるのではないかでしょうか。私は、そこにあえて挑戦する気持ちでやっています。

バンガラデシュでは、子どもは2歳半くらいで母乳を離れ、13、14歳で結婚や労働を迎えるようになります。その10年の間に人々は家庭、地域社会、あるいは社会と、絶えず新たな人間関係を広げていきます。この、いわば人生の激動の10年を見る方法、は、バンガラデシュの文化を理解する上で、非常に重要であると考えています。

朝倉 学校では、お弁当やおやつはどうなっているのですか。

南出 給食の制度はないとですが、海外からの支援で、牛乳やピスケットを配るという取り組みが最近までされています。学校の先生も、私に宿題を出し、宿題をこければ怒るというような、あえてそういう立場をとてくれています。

山本 現地に行って、まず実感したのは、私たちが調査に入ること自体が、地元の人たちにとっては、いいインパクトであるということです。経済的な意味合いだけでなく、村人のいろいろな考え方がこちらにとどっと押し寄せてきて、まさに、村の一つのフィールドワークの場となるのです。たえ一時的にせよ、研究者が調査に入ることによって、村の政治的な構造が大きく変わったという可能性もあるわけです。

南出 和也（みなみ・かずよ）
私は、子どもとかもかわ negeriの大阪校を組織してきました。【教育】はつながりを固めているバンガラデシュの子ども研究が、将来、日本の教育の場に、何らかの形で貢献できればいいなと思っています。
山本 聖（やまもと・せいし）
2003年に総研大に入学し、やって研究者としてのスタートラインに立つことができました。論文から読むと、自分が学んだことは多く、研究テーマがどんどんと変わっていきます。当面の課題としては、アンデス形成期の社会発展のプロセスを考察すること、協力していただけるペルーの人たちとの友好関係を築くことを第一に考えています。

指導教官の先生からは「どういった人たちと出会ったかはよく見えるように書くといい」と言っていただきましたが、たんに、傾向や状況を限界的に把握するのは難しい、そこでどのように子どもたちが生活しているかを、学校という場にどうかわっているかが、生き生きと見えてくるような論文にしたいと思っています。

朝倉 山本さんは、「考古学的手法を使った文化人類学」を考えていくのですね。

山本 はい。そういう意味では、アッテルの考古学的研究を、人類学あるいは現代社会の実態にどのようにつなげていくかが今後の課題です。

たとえば、遺跡の大型化や巨大建造物は、当時の社会的秩序や権力のあり方を反映していると考えられます。そこから、現代国家の枠組みに対する何かのか社会・政治の指標をみる上でも重要ではないでしょうか。

いま、フィールドで得られたデータを論文の中でどう表現するかうかわかりませんが、私の場合は、対象である社会の人間の直接見えない部分ですが、発見で得られたデータをそのまま書けるという点では楽なものかもしれません。ただし、調査の中では遺跡が政治的・社会的に使われるという可能性もありますので、データの記録が簡単であるとは一概に言えませんし、……

高 いま東南アジアでは、さまざまな伝統文化が観光開発と結びついて再生されています。私は、仏像がいる「創られた伝統」としてではなく、民衆の中に生じ、伝統芸能として再生・創造されてきたことを論文で示したいと思っています。また、考察の仕方で研究が「抵抗の文化」といった側面からの視点があり、生きた世界の観点で考察をし、ほとんど見られませんの、この意味でも、伝統文化をとらえるうえで、一つのケーススタディになっていうのではないかと考えています。

朝倉 皆さんに、フィールドワークで得られたデータから、ぜひ「生きた」論文書いてもらいたいと期待しています。

（2003年11月13日、
国立民族学博物館にて収録）
（構成：白石厚郎）